

寺田寅彦全集 第一卷

寺田寅彦全集

第一卷

寺田寅彦全集 第1巻 (全17巻)

---

1960年10月7日 第1刷発行©  
1978年9月12日 第10刷発行

¥ 800

著 者 寺 田 寅 彦

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5  
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・三水舎

---

落丁本・乱丁本はお取替いたします

随  
筆  
一



目次

根岸庵を訪う記	七
東上記	一四
半日ある記	二六
星	三〇
祭り	三一
車	三三
窮理日記	三五
鳴つき	三六
高知がえり	三九

こがらし	四四
雪ちゃん	四六
どんぐり	五〇
竜舌蘭	五六
あらし	六三
森の絵	六九
枯れ菊の影	七二
やもり物語	八二
障子のらく書き	八八
イタリア人	九三
花物語	九九
まじよるか皿	一一四

先生への通信	一二〇
物理学の応用について	一三七
方則について	一四二
知と疑い	一五四
物質とエネルギー	一五七
科学上における権威の価値と弊害	一六四
科学者と芸術家	一七一
自然現象の予報	一八〇
時の観念とエントロピーならびにプロバビリテイ	一九五
物理学と感覚	二〇一
瀬戸内海の潮と潮流	二一二
物理学実験の教授について	二一六



夏の小半日	二二三
津田青楓君の絵と南画の芸術的価値	二二七
研究的態度の養成	二四三
戦争と気象学	二四六
かえるの鳴き声	二四九
注解	二五一
後記	二五三

## 根岸庵を訪う記

九月五日動物園の大蛇たいじやを見に行くとして京橋きやうはしの寓居ぐきよを出て通り合わせの鉄道馬車うゑのに乗り上野へ着いたのが二時ごろ。きょうは曇天で暑さも薄く道も悪くないのでなかなか公園もにぎおうている。西郷さいごうの銅像の後ろから黒門くろもんの前へぬけて動物園のほうへ曲がると外国の水兵じんりきが人力と何かやかましく言つて値ぶみをしていたが話がまとまらなかつたと見えてまもなく商品陳列所のほうへ行つてしまった。マニラの帰休兵とかで茶色の制服に中折れ帽をかぶつたのがここばかりでない途中でもたくさん見受けた。動物園は休みとみえて門が締ますまっているようであつたから博物館のほうへそれて杉

林ばやしの中へはいつた。ブランコに四五人子供が集まつて騒いでいる。ふり返つて見ると動物園の門に田舎者いたなかものらしい老人と小僧と見えるのが立って掛け札を見ている。そこへ美術学校のほうから車が二台幌ぼろをかけたのが出て来たがこれもそこへ止まつて何か言うている様子であつたがやがてまた勸工場かんとくのほうへ引いて行つた。自分も陳列所前の砂道を横切つて向かいの杉林にはいるとパノラマ館の前でやつている楽隊がおもしろそうに聞こえたからついそつちへ足が向いたがちやうどその前まで行くと一切ひとぎり済んだのであろうぴたりとやめてしまつて楽手は煙草たばこなどふかしてじろじろ見物の顔を見ている。後ろへ回つて見ると小さな杉が十本ぐらいある下に石の観音かんのんがころがつている。何々なになに大姉だいしと刻してある。まさかに墓表とは見えぬまた墓地でもないのを見るとなんでもこれはそこで情夫に殺された女か何かの供養に立てたのではあるまいかなど凄凉せいりやうな感に打

たれてそこを去り、館の裏手へ回ると坂の上に三十ぐ  
らいの女と十歳ぐらいの女の子とが枯れ枝を拾うてい  
たからこれに上根岸かみねぎしまでの道を聞いたら丁寧ていねいに教えて  
くれた。不折ふせつの油絵あぶらえにありそうな女だなど考えながら  
博物館の横手大猷院尊前たいゆういんそんぜんと刻した石燈籠いしどうろうの並んだ所を  
通って行くと下り坂になった。道ばたに乞食こじきが一人し  
ゃがんでしきりにぬかずいていたがだれも慈善家でな  
いと見えてびた一文も奉捨ほうしよにならなかつたのは気の毒  
であった。これが柴しばとりの言うた新坂しんさかなるべし。つく  
つくほうしがやかましいまで鳴いているが車の音の聞  
こえぬのはありがたいと思つていると上野から出て来  
た列車が煤煙ばいえんを吐いて通つて行つた。三番と掛け札し  
た踏切を越えようと桜木町さくらぎちようで辻つじに交番所がある。帽子を  
取つてうやうやしく子規しきの家を尋ねたが知らぬとの答  
えゆえ少々意外に思つて顔を見つめた。するとこれが  
案外親切な巡査で戸籍簿こせいぼのようなものを引っくり返し

て小首を傾けながら見ておつたが後ろを見かえつて内  
に昼ねしていたいま一人のを呼び起こした。交代の時  
間が来たからと言つてついでにこの人にも尋ねてくれ  
たがこれも知らぬ。この巡査の少々横柄よこがた顔がしゃくに  
さわつたれども前のが親切に對しまたうやうやしく礼  
を述べて左へ曲がつた。なんでも上根岸八十二番とか  
思つていたが家々の門札かどに氣をつけて見て行くうち前  
田だの屋敷やしきというに行き当たつたので漱石師そうせきに聞いた事  
を思い出して裏へ回ると小さな小路かどで角かどに鶯横町うぐいすよこちようと  
札が打つてある。これをはいつて黒板塀くろいたべいと竹やぶの狭  
い間を二十間ばかり行くと左側に正岡まさおか常規つねのりとかなり新  
しい門札がある。黒い冠木門かぶきもんの両開き戸をあけるとす  
ぐ玄関で案内を請うと右わきにある台所で何かしてい  
た老母らしきが出て来た。姓名を告げて漱石師よりか  
ねて紹介のあつたはずである事など述べた。玄関にあ  
る下駄げだが皆女物で子規のらしいのが見えぬのがまず胸

にこたえた。外出という事は夢のほかないであろう。枕上のしきを隔てて座を与えられた。初対面の挨拶もすんであたりを見回した。四畳半と覚しき間の中央に床をのべて糸のように瘦せ細ったからだを横たえて時々咳が出る。枕上の白木の箱のふたを取っては吐き込んでいる。青白くて頬の落ちた顔に力なけれど一片の烈火瞳底に燃えているように思われる。左側に机がある。って俳書らしいものが積んである。机に倚る事さえかなわぬのであろうか。右わきには句集など取り散らして原稿紙に何か書きかけていた様子である。いちばん目に止まるのは足のほうの鴨居に笠と簞とをつるして笠には「西方十萬億土順礼 西子」と書いてある。右側の障子の外がホトトギスへ掲げた小園で奥行き四間もあるうか萩の元を束ねたのが数株心のままに茂っているが花はまだついておらぬ。まいかいは花が落ちてうてながまだ残ったままである。白粉花ばかりは咲き

残っていたが鶏頭は障子にかくれてちょうど見えなかった。熊本の近況から漱石師のうわさになって昔話も出た。師は学生のころは至って寡言な温順な人で学校なども至って欠席が少なかったが子規は俳句分類に取りかかってから欠席ばかりしていたそうだ。師と子規と親密になったのは知り合ってから四年もたって後であつたが懇意になるとずいぶん子供らしく議論なんかして時々けんかななどもする。そういうふうであるから自然細君といさかう事もあるそうだ。それをあらかじめ知っておらぬと細君も驚く事があるかもしれぬが根が気安すぎるからの事であるゆえ驚く事はない。いったいだれに対してもあたりの良い人の不平の漏らし所は家庭だなど言う。室の庭に向いたほうの鴨居に水彩画が一葉隣室に油絵が一枚掛かっている。皆不折が書いたので水彩のほうは富士の六合目で磊々たる赤土くれを踏んで向こうへ行く人物もある。油絵はお茶の水

の写生、あまり名画とは見えぬようである。不折ほど熱心な画家はない。もう今日の洋画家中唯一の浅井忠氏を除けばいずれも根性の卑劣な媚嫉の強い女のようなやつばかりで、浅井氏が今度洋行するとなるとだれもその後任を引き受ける人がない。ないではないが浅井の洋行がいやであるから邪魔をしようとするのである。驚いたものだ。不折のごときも近来評判がよいので彼らのねたみを買いすでに今度仏国博覧会へ出品するつもりも審査官の黒田らがしようもあるうに零点をつけて不合格にしてしまったそうさ。こういうふうであるからまじめに熱心に斯道の研究をしようという考えはなく少しく名が出れば肖像でもかいて黄白をむさぼろうというさもしいやつばかりで、中にたまたま不折のような熱心家はあるが貧乏であるから思うように研究ができぬ。そこらの車夫でもモデルに雇うとなると一日五十銭も取る。少し若い女などになるとど

うしても一円は取られる。それでなかなか時間もかかるから研究と一口に言うても容易な事ではない。景色画でもそうさ。先ごろ上州へ写生に行つて二十日ほど雨のふる日も休まずにかいて帰つて来ると浅井氏も一週間行つて直して来いと言われたからまた行つて来てようようできあがつたと言つていたそうさ。それでもとにかく熱心がひどいからあまり器用なたちでもなくまだ未熟ではあるが成効するだらうよ。やはりホトトギスの裏絵をかく為山という男があるがこの男は不折とまるで反対なたちで趣味も新奇な洋風のを好む。いったい手先は不折なんかとちがつてよほど器用だがどうも不勉強であるから近来は少々不折に先を越されそうさ。それがちと近来不平のようであるがそれかというてやはり不精だからしかたがない。あのくらの天才をいだけながらついに不折の熱心に勝ちを譲るかもしれないぬなど話しているうち上野からの汽車が隣の植

え込みの向こうをぎんぎんと通った。隣の庭の折り戸の上からすが三羽おりてガーガーとなく。夕日が畳の半分ほどはいつて来た。不折のいちばん得意で他に及ぶ者のないのは「日本」に連載するような意匠画でこれこそ他に類がない。配合の巧みな事材料の豊富なものには驚いてしまう。たとえば犬百題などいう難題でもどこかから材料を引っぱり出して来て苦もなくこしらえる。いったい無学と言ってよい男であるからこれはきつと僕らがいろんな入れ知恵をするのだと思う人があるようだがなかなかそんな事ではない。僕らが夢にも知らぬような事がたくさんあって一々説明を聞いてようやく合点がてんが行くくらいである。どうも奇態な男だ。せんだって日本新聞に掲げた古瓦ふるがわらの絵などは最も得意でまた実際まねはできぬ。あの瓦の形を近ごろ秀真はすまという美術学校の人が鋳物にして茶托ちやたくにこしらえた。そいつができそになったのを僕がもろうてあるか

ら見せようとて見せてくれた。十五枚のうちようよう五枚できたそうで、それも穴だらけにできて中に破れて繕ったのもあるが、それがかえって一段の趣味を増しているようだと言うたら子規も同意した。巧みに古色が付けてあるからどうしても数百年前のものとしか見えぬ。中に蝸牛かたつむりをはわして「角つのふりわけよ」の句が刻してあるのなどはずいぶんおもしろい。絵とちがって鋳物だから蝸牛がたいへんよくきいてるとか言うて不折もよほど気に入った様子だった。羽織はおりを質入れしてもぜひこしらえさせると言うていたそうだと。話半ばへ老母がコーヒーをくんで来る。子規には牛乳を持って来た。汽車がまた通ってつくつくほうしの声を打ち消していった。初対面からちとあつかましいようではあったが自分は生来絵が好きでかねてよい不折の絵がわけても好きであったからついでがあったらなんでもよいから一枚くれまいかと頼んでくださいと言っ

たら快く引き受けてくれたのはうれしかった。子規も小さい時分から絵画は非常に好きだが自分はいっこうかけないのが残念でたまらぬとかこっていた。夕日はますます傾いた。隣の屋敷で琴が聞こえる。音楽は好きかと聞くともちろんきらいではないが悲しいかな音楽の事は少しも知らぬ。どうか調べてみたいと思うけれどもこれからでは到底ためであろう。もっともこのごろ人の話でおおよそこんなものかぐらいはわかったようだが元来西洋の音楽などは遠くの昔バイオリンを聞いたばかりでピアノなんか一度も聞いた事はないからなおさらだめだ。どうかしてあんなものが聞けるようにも一度なりたいと思うけれどもそれもだめだと言うてしばらく黙した。自分はなんと言うてよいかわからなかった。黯然あんぜんとしてわれも黙した。また汽車が来た。いろいろ議論もあるようであるが日本の音楽も今のままでは到底見込みがないそうだ。国が箱庭的であ

るからか音楽まで箱庭的である。一度音楽学校の音楽室で琴の演奏を聞いたが遠くで琴が聞こえるくらいの事で物にならぬ。やはり天井の低い狭い室へやでなければ引き合わぬと見える。それに調子が単純で弾ずる人に熱情がないからなおさらいかん。自分は素人しろうと考えでなんでも楽器は指の先でひくものだから女に適したものとばかり思っていたがなかなかそんな浅いものではない。日本人が西洋の楽器を取ってならず事はならずが音楽にならぬというのはつまりひき手の情が単調で狂するという事がないからで、西洋の名手とまで行かぬ人でも楽がくの大切なおもしろい所へくるといっさい夢中になつてしまふそうだ。こればかりは日本人のまねのできぬ事でしたし方がない。ことに婦人はだめだ、冷淡で熱情がないから。露伴ろはんの妹などは一時評判であったがやはりだめだという事だ。空が曇ったのか日が上野の山へかくれたか畳の夕日が消えてしまいつくつく

ほうしの声が沈んだようになった。からすはいつのまにか飛んで行っていた。また出ますと言うたら宿はどこかと聞いたから一兩日中に谷中のやなか禪寺へこもる事を話して暇を告げて門へ出た。隣の琴の音が急になって胸をかき乱さるるような気がする。知らず知らずそのほうへと路次をはいると道はいよいよ狭くなって井戸が道をさえぎっている。そのそばで若い女が米をといでいる。流しの板のすべりそうなのを踏んで向こう側へ越すと柵さくがあってその上は鉄道線路、その向こうは山のすそである。そこを右へ曲がるとようよう広い町に出たから浅草あさくさのほうへと足を運んだ。琴の音はやはりついて来る。道がまた狭くなつてもとの前田邸の裏へ出た。ここから元来た道を交番所の前まであるいてここから曲がらずにまっすぐに行くともた踏切を越えねばならぬ。琴の音はもうついて来ぬ。森の中でつくつくほうしがゆるやかに鳴いて、日陰だから人が蝙蝠こうもり

傘がさをあみだにさしてゆるゆるあるく。山の上には人がたくさん停車場から凌雲閣りょううんかく\*のほうをながめている。側の柵の中で子供が四五人石炭車に乗ったり押したりしている。機関車がすさまじい音をして小家の向こうを出て来た。浅草へ行くつもりであったがせっかく根岸で味おうた清閑の情を軽業かるわざの太鼓おさい銭の音にけがすがいやになったから山下やましたまで来ると急いで鉄道馬車に飛び乗って京橋きょうはしまで窮屈な目にあつて、向こうにすわった金縁めがね隣にすわったはげ頭の行商とあくびの掛け合いで帰って来たなら大通りの時計台が六時を打った。

(明治三十二年九月)



## 東上記

八月二十六日床をいでてまず欄干による。空よく晴れて朝風やや肌寒く露の小萩のみだれを吹いて葉鶏頭の色あざやかに穂先おおかた黄ばみたる田面を見渡す。薄霧北の山の根に消えやらす、柿の実まき砂にかちりと音して宿夢ぬぐうがごとくにさめたり。しばらくの別れを握手に告ぐる妻が鬢のおくれ毛に風ゆらぎて蚊帳のすそゆらゆらと秋もはや立つめり。台所に杯盤の音、戸口に見送りの人声、はやいで立たんと吸い物の前にすわれれば床の間の三宝に枳殻飾りし親の情けまずありがたく、この枳殻誤って足にかけたれば取りかえてよと言う人の情けもうれし。杯一順。早く行って船

室へ場を取りませねばと立ち上がれば婢僕親戚上がり框につどいて荷物を車夫に渡す。忘れ物はないか。ござりませぬ。そんなら皆さんごきげんよくも言つたつもりなれどやや夢ごこちなればたしかならず。玄関をいずれば人々も砂利を鳴らしてついて来る。用意の車五両口々に何やら言えどよくは耳に入らず。からからと引きいだせばあとにまたごきげんよの声々あまり悪からぬものなり。見返る門柳監獄の壁にかくれて流れる水にさざ波動く。韋駄天を叱する勢いよく松が端に駆けつければ旅立つ人見送る人人足船頭ののしる声々。車の音。端艇岸をはなるれば水棹のしづく屋根板にはらはらと音する。舷のすれあう音ようやくやんで船は中流にいでたり。水害のなごり棒堤にしろく砂利に埋もるる蘆もあわれなり。左側の水楼に座してこなたを見る老人のあればきつと中風よとはよき見立てと竹村はやせば皆々笑う。新地の弦歌聞こえぬがうれ